

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

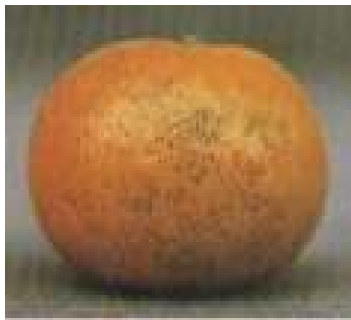
平成28年度病虫害発生予報第4号(7月)について

このことについて、病虫害発生予報第4号を発表したので送付します。

予報第4号

梅雨期の大雨・長雨による病害発生に注意しましょう！

今後の気象予報では、降水量が平年並か多いと予想されています。病害は降雨により伝染するものが多いので、適期の薬剤散布に加え、発病した部位や株はほ場から持ち出し、雨前後の防除を徹底することにより多発を防止しましょう。



カンキツ 黒点病



カンキツ かいよう病



ナシ 黒星病



チャ 炭疽病



チャ もち病



イチゴ うどんこ病

<予想される向こう1か月の天候(平成28年7月2日~平成28年8月1日)>

期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並みか多く、日照時間はほぼ平年並でしょう。

週別の気温は、1週目は平年より高く、2~4週目は平年並か高いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並40 高50% 高い見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み

（福岡管区气象台 平成28年6月30日発表抜粋）

7月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稻	セジロウンカ トビイロウンカ	やや多 並	やや多 並	多 並
カンキツ	黒点病 ミカンハダニ	やや多 少	多 少	多 少
ナシ	黒星病 ナシヒメシンクイ	多 やや少	多 やや少	並 やや多
カキ	炭疽病 フジコナカイガラムシ	やや少 並	並 並	多 やや少
果樹共通	チャバネアオカメムシ	並	—	並
茶	炭疽病 カンザワハダニ	並 やや少	やや多 並	多 並
冬春イチゴ (育苗期)	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	やや多 並 やや多	やや多 やや多 やや多	並 やや多 多

*果樹共通・チャバネアオカメムシの平年比について、現況は年次変動が大きいいため前年比としている

作物別発生予報

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

【普通作物：水稻】

1 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

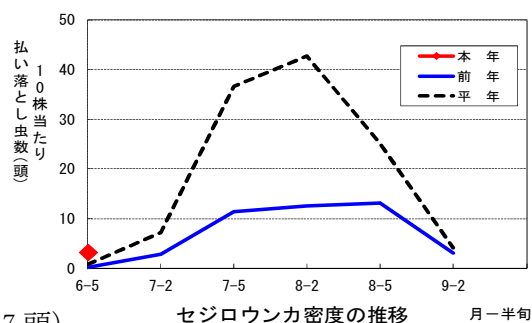
ア 5月3日にネットトラップで、初飛来を確認した。

イ 6月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～＋）。

10株当たり成幼虫数3.30頭（平年0.75頭、前年0.17頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

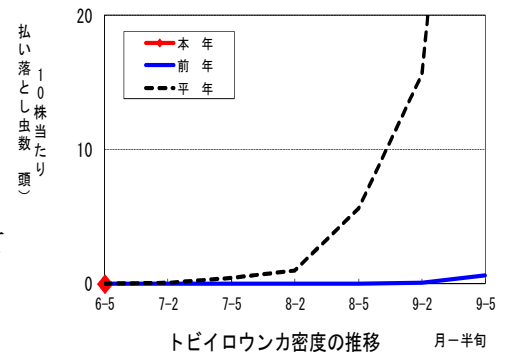
(3) 防除上注意すべき事項



- ア 今後の飛来状況に十分注意する。
- イ 箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。
また、移植時期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。
- ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 10の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

2 トビイロウンカ

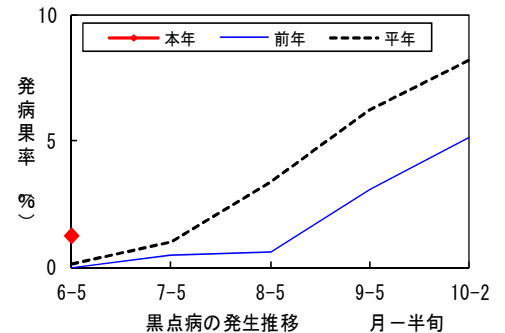
- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
 - ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
10株当たり成幼虫数0頭（平年0.01頭、前年0頭）
 - イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。
- (3) 防除上注意すべき事項
 - ア 今後の飛来状況に十分注意する。
 - イ 箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。
また、移植時期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。
 - ウ ほ場内では集中分布するので、ほ場全体の発生状況を把握する。



【果樹：かんきつ】

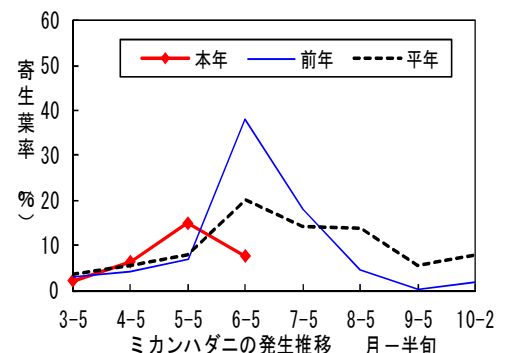
1 黒点病

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年より多
- (2) 予報の根拠
 - ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。
発病果率 1.2%（平年0.2%、前年0%）
発生ほ場率 18.2%（平年8.3%、前年0%）
 - イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。
- (3) 防除上注意すべき事項
 - ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。
 - イ 梅雨時期は、前回防除後の積算降雨量や散布間隔に応じた適期防除を行う。
 - ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 10の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 ミカンハダニ

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年より少
- (2) 予報の根拠
 - ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。
寄生葉率 7.7%（平年20.2%、前年38.1%）
発生ほ場率 36.4%（平年60.4%、前年72.7%）
 - イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。
- (3) 防除上注意すべき事項
 - ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。
 - イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

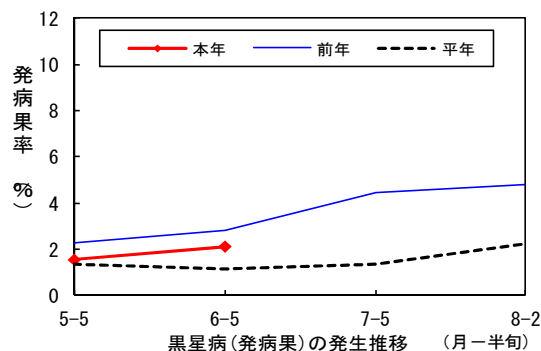
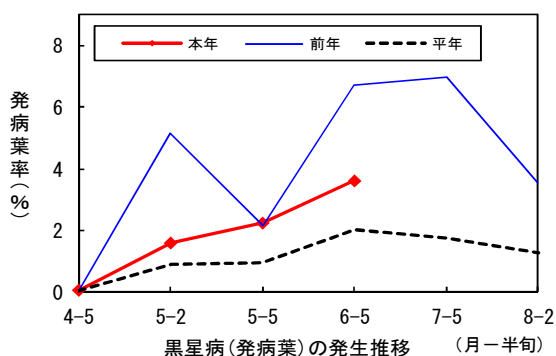
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉率 3.6% (平年 2.0%、前年 6.7%)

発生ほ場率 90.9% (平年 61.4%、前年 90.9%)

発病果率 2.1% (平年 1.2%、前年 2.8%)

発生ほ場率 81.8% (平年 40.3%、前年 72.7%)



イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 薬剤防除にDMI剤を用いる場合は、平成28年度病害虫・雑草防除の手引き 3防除方法の試験研究成果等 果樹Ⅶの項を参照のこと。

http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/203227_51694555_misc.pdf

2 ナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

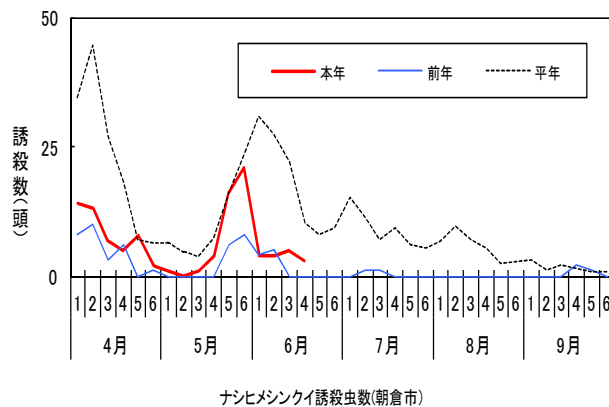
第1世代成虫発生時期である5月4半旬~6月4半旬のフェロモントラップの誘殺虫数は、57頭(平年138頭、前年23頭)(地点名：朝倉市杷木町)で平年よりやや少なかった(−~±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発蛾最盛期直後を目安に防除を行うが、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多くみられる場合は、1回目の防除の7~10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除にあたっては果実に薬液が十分かかるように散布する。

ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。

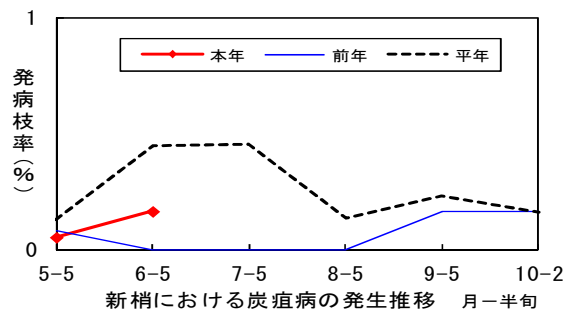


【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多



(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病枝率 0.2%（平年 0.5%、前年 0%）

発生ほ場率 25.0%（平年 14.1%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生果率 3.8%（平年 5.3%、前年 7.6%）

発生ほ場率 75.0%（平年 66.7%、前年 75.0%）

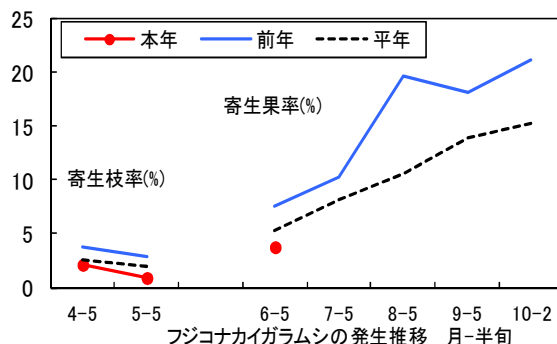
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理し散布むらがないよう丁寧に散布する。

イ 天敵への影響が比較的少ない薬剤で防除する。防除対策の詳細は、県ホームページに掲載している『病害虫・雑草防除の手引き』を参考にして下さい。

URL : http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/203227_51694561_misc.pdf



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年並、前々年より少

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの1㎡当たりの越冬量は平均0.8頭（前年0.9頭、前々年4.8頭）で、前年並であった（±）。

チャバネアオカメムシの越冬量およびヒノキ球果着生量の年次推移

	平成28年	平成27年	平成26年
越冬量(頭/㎡)	0.8	0.9	4.8
ヒノキ球果着生量	やや少	やや少	中

イ 6月1半旬～4半旬までのフェロモントラップによる誘殺虫数は、前年並であった（±）。

誘殺虫数 186頭（前年 238頭、前々年 5,946頭）（調査地点：筑紫野市）

35頭（前年 12頭、前々年 147頭）（調査地点：うきは市）

14頭（前年 36頭、前々年 43頭）（調査地点：八女市）

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 園内の発生状況の把握に努め発生に応じて防除を行う。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ かいよう病	やや多	多	多	・雨媒伝染をするため、風雨前の防除を徹底する。
なし ハダニ類	やや多	やや多	やや多	・多発すると防除が困難になるので、発生が少ない時期に徹底防除する。
かき ハマキムシ類	並	並	並	・ハマキムシ類幼虫は葉と葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤はかかりムラがないよう十分量を丁寧に散布する。 ・ハマキムシ類の発生が多い園では、8月上旬～中旬の防除を徹底する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉数 0.5葉(平年0.9葉、前年3.1葉)

発生ほ場率 50.0%(平年24.0%、前年87.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

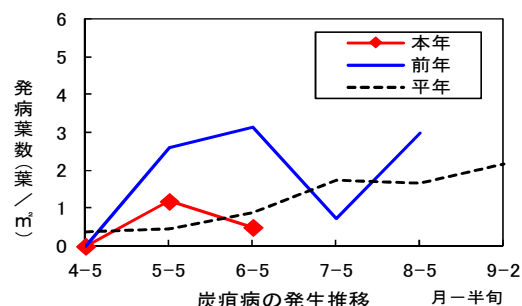
(3) 防除上注意すべき事項

ア 摘採・整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

イ 雨滴により孢子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-～±)。

寄生葉率 2.0%(平年3.5%、前年0%)

50葉当たり虫数 3.9頭(平年6.4頭、前年0頭)

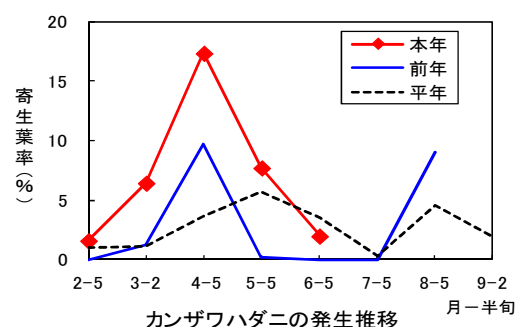
発生ほ場率 20.0%(平年24.3%、前年0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、摘採後、多発する前に速やかに防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【茶：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
もち病	やや多	多	多	・三番茶を摘採する園では二番茶摘採後、摘採しない園では秋芽について、各々萌芽から1葉期までに防除を行う。
チャノキイロアザミウマ	少	少	やや少	・発生状況に注意し、たたき落とし（B5判上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。 ・新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
チャノミドリヒメヨコバイ	少	少	少	・発生状況に注意し、たたき落とし（B5判上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。 ・新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
チャノコカクモンハマキ	並	並	やや多	・第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月下旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。 ・巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャノホソガ	少	少	並	・第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月上～中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。 ・巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャトゲコナジラミ	やや少	少	やや多	・チャトゲコナジラミは年3～4回発生し、防除適期は若齢幼虫発生期で、親世代成虫の発生が収まった頃である。配信される技術情報や茶園での成虫の発生状況に注意して防除に努める。 ・幼虫は葉裏に寄生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。

【野菜：イチゴ（育苗期）】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

発病株率 21.0%（平年 19.0%、前年 14.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

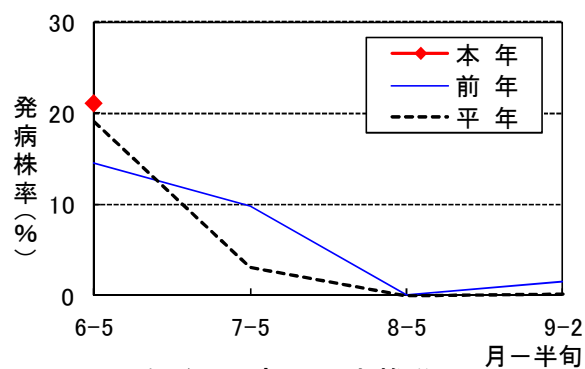
(3) 防除上注意すべき事項

ア 不必要な親株は、育苗ほから速やかに撤去する。

イ 軟弱徒長にならないよう、苗の間隔を空け通風を図る。

ウ 葉かきを強めに行い、伝染源である発病葉を取り除くよう努める。また、摘葉後には薬剤防除を徹底する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



うどんこ病の発生推移

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病株率 0.14% (平年 0.1%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

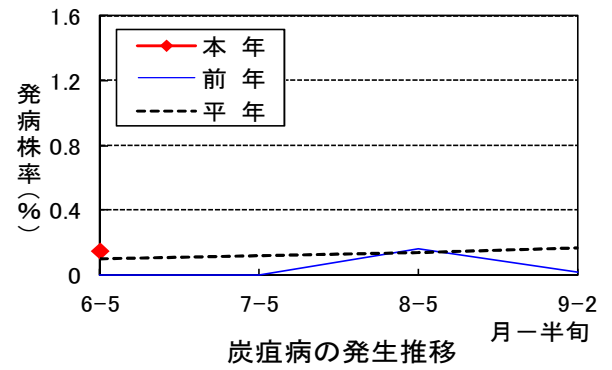
ア 不必要な親株は、速やかに育苗ほから撤去する。

イ 雨よけ育苗等でも風通しが悪いと発病しやすいので、苗の間隔を空け通風を図る。

ウ 窒素肥料を多用すると発病しやすいので、適正な肥培管理に努める。

エ 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがあるので、ほ場内での発生状況に注意し、発病苗及び周辺の苗は速やかに持ち出し処分する。

オ 葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的に予防散布を徹底する



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

寄生株率 12.9% (平年 8.3%、前年 7.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 不必要な親株は、速やかに育苗ほから撤去する。

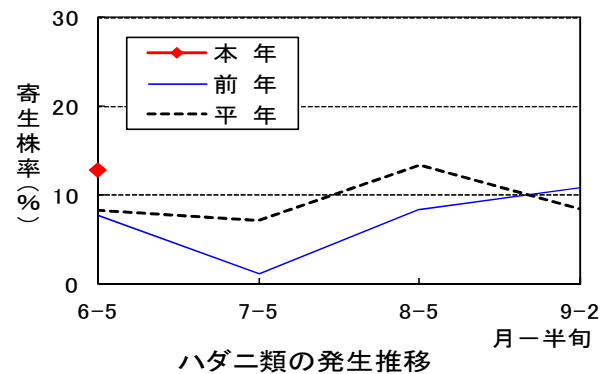
イ 葉かきを強めに行い、寄生葉を取り除くよう努める。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し、処分する。

ウ ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

エ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

オ 抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用は避ける。

カ 土着天敵を活用するため、天敵への影響が大きい有機リン系薬剤や合成ピレスロイド系薬剤を不必要に多用することは避ける。



予察調査から見た梅雨時期に発生が警戒される病害の特徴

○カンキツ黒点病

葉、果実、枝に発生します。

最初、果実等の表面に黒い小さい斑点がポツポツできます。感染時の病原菌の密度が低い場合には0.1～0.5mmの黒色で円形の黒点となりますが、菌密度が高い場合には雨滴の流れた跡にそって発病し涙斑状となり、さらに果実一面に感染して泥塊状となります。

病斑の特徴は感染時期により異なり、6～7月にみられる病斑（前期感染病斑）は泥塊状の病斑で、まわりに白いふちどりが見られます。また、黒点は果実表面から飛び出してガサガサしています。

○カンキツかいよう病

葉・枝・果実に発生します。

葉では最初に白色～淡い黄色のかさぶた状の小斑点ができ、次第に拡大し褐色になり中央部がコルク状となります。病斑は葉が成熟する頃には直径2～5mm程度となり、その周縁には幅1～2mmの黄色のかさ（ハロー）が見られます。

緑枝や果実では最初に水浸状（水につかったような状態）の濃い緑色の病斑が見られ、その後次第にコルク状となり、褐色の盛り上がったかさぶたのようになります。

○ナン黒星病

果実、葉、枝などに黒いスス状の病斑があらわれます。

葉では葉柄、葉脈上にそってススを盛ったような病斑ができ、激しく発病したものは落葉します。また、葉の葉脈上でないところにも角張った小病斑（表からは黄ばんで見え、裏にススを密生）を作ります。

葉柄、果梗では初めススを塗ったような病斑ができ、やがてススがとれて黒褐色になります。

幼果ではスス状のややへこんだ病斑となり、果実が大きくなるとかさぶた状の病斑となり、ひび割れを生ずる場合があります。

○チャ炭疽病

葉のみに発生します。

最初に0.2～0.5mm程度の針頭大の淡褐色小斑点ができます。その後、この小斑点を起点に周囲の葉脈の褐変が進むと次第に葉身が壊死し、病斑は中央部がやや陥没し灰褐色となり、その周囲は濃い赤褐色を呈する円形または不整形の大型病斑となります。この病斑上には褐色～暗褐色の小粒点が多数生じます。

○チャもち病

はじめ葉の表に淡い黄色の小さな斑点が現れ、数日後には数ミリ～15ミリ程度に拡大してクリーム色の病斑をつくります。これが陥没して円形となり、やがて赤色に変化します。病斑の裏側は著しく肥厚して半球形状のドーム型となり白色粉状となり、もちのようにみえます。

茎にあらわれる病斑は大きく変形し、ひどくなると上部が枯死する場合があります。

○イチゴ（育苗期）うどんこ病

葉・葉柄・果梗・つぼみ・果実に発生しますが、育苗期では主に葉に発生します。最初は葉裏に白い粉をまぶしたような病斑が生じ、ひどい時には葉が巻いてスプーン状に縮むことがあります。

高温時には感染力が低下し、一時的に白い粉状の病斑が見えなくなり、停滞型の症状（白色粉状ではなく、紫色～褐色のしみの様な病斑）となりますが、完全に死滅したわけではないため、本圃でのうどんこ病の発生源となります。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しました。
携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



福岡県病害虫防除所